

日本文化の精髓を 現代的な感性で アップデートして世に届け、 人々の暮らしに新しい価値を与える

大学卒業後、わずか1年あまりでゲストハウス経営の企業を立ち上げ、日本茶ブランドの企画・輸出販売事業、保育園運営へと事業の幅を広げ続ける澤田修司さん。そのすべてに共通するのは、日本の伝統文化を現代的センスで継承し、新たな価値を創造するという独自のコンセプトです。さまざまな分野に新風を吹き込む大胆な挑戦は、どんな考えや生き方に支えられているのか。事業への思いや未来への展望についても語っていただきました。



株式会社シェンゲン
代表取締役
澤田 修司さん
2013年、法学部卒業。大手広告代理店を経て独立し、ゲストハウス経営、日本茶ブランドの企画・輸出販売事業、保育園運営などを手掛ける。プライベートでは、3人の子どもの朝食から送迎までこなす良きパパでもある。朝一杯のお茶を淹れ、花を生ける「静」の時間と、四国まで車を走らせサーフィンを楽しむ「動」の時間をバランスよく楽しみ、仕事のエネルギーに変える日々だ。

「KONAN-PLANET」にも澤田さんの関連記事を掲載しています。ぜひこちらもご覧ください。

世界を旅して見つけた ゲストハウスという可能性

澤田さんの歩みは、誰が見ても起業家のサクセスストーリーそのものだ。しかし、意外にも「起業家」と呼ばれることには抵抗があると言う。「まったく新しい事業を創ったわけではないので、自分を起業家だとは思っていないんです」。しかし、就職した大手広告代理店でテレビCM制作などに携わりながら準備を進め、めどが立った段階で退職、京都にゲストハウス1号店をオープンしているのだ。驚くべき決断力と行動力といえるだろう。「綿密に計算しているみたいですけど、全然、そんなことはなくて(笑)。そもそも公務員に強いとされる法学部に進学したのも、消防士になったから。ところが、高校時代にラグビーだけがをしていて僕には、無理だとわかったんです。そんな中、当時、南米やアフリカなどをバックパッカーとして何度も旅していたため、「お世話になったゲストハウスを日本にも作りたい」と考えるようになりました」。

オープン後は、自ら住み込んで掃除からベッドメイク、食事作りまですべてをこなした。民泊ブーム直前という時期も幸いし、瞬く間に稼働率は98%に達する。着々と施設数を増やすとともに京都市の空き家対策事業の一環として町屋を購入し、リフォーム後に宿泊施設にするといったハイクラスな一棟貸しも軌道に乗せた。

品質に一切の妥協なし。 最高級の茶葉を海外へ

日本茶ブランドの企画・輸出事業にも着手する。きっかけは、後に仕事のパートナーとなる茶師との出会いだった。「彼の淹れたお茶が、衝撃的においしかったんです。僕自身、実家が畳屋だったので日本茶は身近なものでした。海外の人々にとって日本文化は、どこかスペシャルな存在。そんな彼らに美味しいお茶を提供すれば、ビジネスとして成功すると確信しました」。

課題は、茶葉の仕入れだった。茶師と二人で全国の農家を訪ね、最高級のものを探し歩いた。今でも、各地のお茶農家と取り引きのある澤田さんだが、当時は、まったくの門外漢。「ひたすら農作業を手伝いました。今も、ゴールデンウィークなど新茶の季節になると産地を回って、お茶摘みなどのお手伝いを続けています。その熱意が伝わったのか、問屋を介さず仕入れることができるようになりました」。

輸出する際は、現地で最も売れている水を取り寄せて茶葉との相性を調べ、最高のブレンドを追求するのだとか。妥協のない品質に、海外のみならず国内からもオファーが絶えない。取引先のはほとんどはミシユランガイドに名前を連ねるような著名店ばかりだ。

美意識と主体性を育む、
日本初「和の保育園」

そして今、澤田さんが力を入れていくのが保育園の運営だ。2017年大阪・上本町を皮切りに2018年京都、

2021年大阪・鞆本町と開設。多忙な澤田さんを保育園という異業種へと駆り立てたのは、一体、何だったのだろうか。「子どもが生まれたのがきっかけです。認可保育園に入れなくて…じゃあ、自分で作ってしまおう!と(笑)」。

思いつきで始めたかのような口調だが、保育園には澤田さんらしいこだわりが詰まっている。園舎は、温かみのある無垢の木と畳をメインに、天井や障子には京都府指定無形文化財である黒谷和紙を使用。幼少期から本物に触れながら美意識を育てたいという願いが詰まった日本初の「和の保育園」だ。保育方針には、イタリヤで生まれたレッジョ・エミリア・アプローチを採用した。子どもを可能性に満ちた存在として尊重し、主体性を育む教育理念に共感しました。保育士の先生方は、あくまでもサポーター。子どもたち自身が考え、話し合う中で世界に通用するコミュニケーション力を身につけながら成長してほしいと思います」。

2022年11月には、保育業界専門の転職支援サービス「保育のカタチ」もスタート。澤田さんにとって初となる人材派遣業への参入は、子どもの豊かな未来を創るだけでなく、保育士の労働環境を改革するという決意の表れでもある。

卓越した
経営センスと感性で
新たな価値を創り出す

澤田さん自身は、どんな子どもだったのだろう。「変なことばかりする異端児でした(笑)。そのせいで小学校時代は、い

いつもの保育園 外観/温かみのある無垢の木や畳を用い、まるで高級老舗旅館のような佇まいの「和の保育園」



じめられたこともあります。いつも何となく生きづらさを感じていた僕にとって甲南の空気感は、すごく心地よかったです。初めて伸び伸びと学ぶことができた。大学との絆は、実業家となった今、さらに深まっていると言つ。「企業の経営者には、甲南出身の方が多くいます。みなさん、親身にアドバイスしてくださったり、集まりに招いてくださったり。甲南ファミリーの絆に支えられています」。

かつて生きづらさを感じていた異端児は今、何をめざすのか。「企業には利益の確保が不可欠ですが、それを最優先にするのではなく、僕たちが美しいと思うものや心動かされるものを事業化し、新たな価値を創造するのが目標です」。きつぱりと語る表情に野心と自信がのぞく。その経営センスとアーティスティックな感性が描き出す未来に期待したい。